新たな移住・定住に関する研究会（第３回）【開催概要】

１　日　時

令和３年３月２日（火）午前１０時～午後１２時まで

２　形　式

Web 会議（Zoom）

３　出席者

【研究会メンバー】

井上章一氏、内永ゆか子氏、小林正忠氏、佐野奈帆氏、鈴木博之氏、田村篤史氏

【京都府】

山下副知事、本永企画調整理事、西村企画参事

４　議事内容

＜主な意見＞

■関係人口の取り込みについて

○地域が自助努力をするのが大前提だが、地域住民だけが考えるのではなく、外部の人の考え方も取り入れながら、その地域をどうしていくか考えられる仕組みが必要ではないか。

○関係人口をどう捉えるか。例えば２年程度のプロジェクトベースで他府県よりスタートアップ等の事業進出プレイヤーを集める支援パッケージははどうか。プロジェクト後は去っても構わないとするが、１年終了時に当初の目標に達していなければ助成金が減る等、２年間で達成しなければ返金が発生するような仕組みが良い。（結果にコミットしてもらう仕組みは必要）

○観光施設が関係案内所になる可能性がある。ゲストハウスの元宿泊客がその周辺に移住するケースが複数あり、ゲストハウスが地域住民の人たちと交流する拠点となっている。関係人口における宿泊施設のあり方というのは論点になり得るのではないか。

■移住のスタイルについて

○京都府北部に首都圏から移住するのは物理的なハードルがあり難しく、関係人口も同様。一度京都市内に移住し、その後府北部に２段階で移住するという事例がこの約６年間で出てきている。

○ライフステージごとに住む場所を変える提案が京都府としてできると良いのではないか。また、ライフスタイルという切り口もある。例えば亀岡市がプラスチックごみをゼロにするという政策を行っている結果、環境意識の高い人が移住相談に来ることが多い。地域のライフスタイルを特色として打ち出すことはできないか。

○東京と京都での二地域居住について、東京は何でも手に入り便利で、京都は生活や食事等の全てから日本の伝統や四季を感じるのが良い。一方で、移動が多くなることがマイナス。しかし、全体的にはプラスに感じることが多く、観光ではなかなか入り込めなかったところまで入ることができ、快適に暮らしている。

■海外からの移住等、より広い範囲での取組について

○自助努力を促す支援施策は理にかなっている。また、府内のみで自らの魅力を発信するのではなく、より広域に発信する場合に支援を厚めにした方が府内の人口の奪い合いを抑制できるのではないか。

○移住について国内で考えた場合、基本的にゼロサム。国外から人を入れていくことを考えると、田舎暮らしを好む方は海外の方に多いため、世界から見ても人を惹きつける京都の魅力をうまく活用するというのも１つの考え方なのではないか。
○海外のほとんどの人は、京都府が海外の人に対して魅力をアピールしたいと考えていることを知らないのではないか。グローバルコミュニティーを上手く作る必要がある。広く情報発信するのではなく、コアを作り、そこから情報発信するべき。例えば環境問題に取り組むなど、京都府らしいやり方で何かテーマを設定しまちづくりをやり、それに関係ある人を呼び込むのも１つの方法ではないか。

■移住を促進したい地域が設定するテーマについて

○サスティナブルなまちづくりを地域テーマの１つとしても良いのではないか。発電に係る技術革新を取り入れつつ、電気やエネルギーを使わない生活について模索するのはどうか。若い世代は特にアンテナ感度が高いため、移住してそのような生活を試みたいニーズがあるかもしれない。
○京都が考えた新しいイノベイティブなやり方を提案する必要がある。景観を守りながらも自然であり、SDGsであるという、先端を行っているまちという位置づけができないか。
○「始末」という京都の伝統的な概念と、超最先端のテクノロジーを上手く結びつけるのがポイントであり、例えば産総研や京大等、様々な機関とリンクし超最先端のテクノロジーを使いつつ、京都の今までの伝統的な考え方を実行することがポイントとなるのではないか。
○どこに京都の独自性や強みを持ってくることができるのかを考える際に、イノベーションや環境への配慮等、何かを守りながら新しくしていくということは非常に京都らしい。それぞれの施策について京都としてどう個性を出すか考えると、強い魅力になるのではないか。
○環境問題への取組について、町並みに優しくすることと地球に優しくすることは必ずしも両立しないことをどう考えたらいいか。
○学生のまちという切り口を持っている京都だからこそ、全国から学生が東京に次いで京都に集まってくるため、その子たちが地元に帰っていくように大学と連携できないか。京都の大学に行けば、卒業後は地元に帰ってくるとなると、様々な自治体が東京の大学よりも京都の大学に行かせたいと考えるのではないか。その結果、日本の中をかき混ぜるような視点で京都のポジション捉え直すことが可能となる。
○京都には日本のボストンになってほしい。ボストンは大学を中心に、医療関係のイノベーションハブになっている。大学、企業、そしてイノベーターが結果的に集まってきている。なおかつ古い歴史の魅力がある。京都の良さとイノベイティブなところに注力してはどうか。

■その他

○兵庫県の丹波と京都府の丹波を丹波国としてお互いの交流を促進し合うような仕掛けをするのはどうか。京都府と兵庫県が越境し合いながら地域を考えることは、丹後においても可能。
○移住者と、家を貸す方の両方にメリットがあるような施策があるとマッチングが上手くいくのではないか。特に、家を提供する側のメリットとして、家財を撤去する補助金10万円では足りないのではないか。